

2030年、すてきな理想社会、そしてその実現のために

今は、西暦2030年。20年前とは働き方の概念が、すっかり変わりました。

ワタシは今、なんとか破綻しなかった年金を少しだけもらいながら、NPO（非営利組織）の仕事をしています。また、副業的に、昔の仕事の手伝いをしたり、関連する仕事のアイデア出しの仕事を請け負ったりしています。

NPOの人材バンクから、時々、地元のNPOでのヘルプも頼まれています。趣味でちょっとしたイベントの運営もしています。そのほか、子供たちへの絵本の読み聞かせや、臨海学校の手伝いをしたりもしています。

有給の仕事もあれば、無給の仕事もあります。年金の補完に必要なだけ有給の仕事を入れ、あとは面白そうな仕事にノミネートしているのです。

始めることを支援する

これはなにもワタシだけのことではなく、社会全体が複線化・複眼化しています。何かを始めることが、そんなに大したことではなく、普通にあることになってきたからです。そしてそうした始めることを支援する社会システムが整備されてきました。

1人の人が何か1つだけ専門を持つ時代は終わりました。

専門は横に広がり、他の人の専門と共鳴し合ってさらにレベルアップし、興味の対象が広がるごとにプロとしての深みが増していく……。

そういう形で、社会全体で人的資本の蓄積が進み、補完効果が極大化する。そういう経済体質が、一時停滞していたこの国を再起動させたのだ、とワタシは考えています。

子供を育てやすい仕組み作り

朝起きると、またグリーンランドで氷床が崩壊しているニュースが流れていました。

国内ニュースは、今年やっと解消が期待されている財政赤字についてと、海面上昇に伴う退避エリアでの家屋の解体と再資源化の話題です。また、天気予報では久しぶりの冷夏が懸念されていました。

亜熱帯である東京の風土によく似合うかりゆしウェアに着替え、北海道ブランド米のご飯と、デザートに静岡産のパパイアを食べて、さあ、お出かけです。

今日は少し遠くの職場で、子供に絵本の読み聞かせ。

孫の世代は、子の世代よりかなり人数が多いです。

そこで、現役世代では教育スタッフが足りず、ワタシやその他、いろいろな仕事を経験してきた老年世代が、代用教員の仕事をすることが多くなりました。

日本の総人口は1億人を割っています。

ふた昔前は、人口8000万人の時代が来るとか、エネルギー危機で食料生産が滞ってもっと急激な人口減少が起こるとか、さんざん怖い話を聞かされたものです。

実際は、途中で人口の減少は止まりました。40年から20年くらい前までは、それ以前の時代に比べた合計特殊出生率の大幅な低下から、国家が崩壊するのではないかという危機感を抱く人が多くいました。

でも、今ではそれ以前の時代の方が特殊だったのではないかと考えられています。

なぜなら、明治維新の前後の日本の人口は3000万人台、第2次世界大戦が終わった頃で8000万人台。

それが、その後の50年で5割増えて1億3000万人になったのです。医療技術が高度化し、食料生産も石油文明化で高効率化したため、急に人口が増えたのです。

今では、その揺り戻しで人口を安定化させる力が働き、その力が短期的にやや過剰に働いたのが、人口が減少に転じた原因と推測されています。

またその後、政治的にも、家庭が子供を育てにくくなった環境を改善する動きが出てきました。例えば地域のNPO法人が行う学童養育支援プログラム、高等教育に対する学費融資制度の創設、高等教育を受けずとも最初の就職後に各種技能教育を受ける場合の税控除制度など。

実験的に導入された子ども手当制度が破綻したあと、代替的にいくつもの政策提言が切磋琢磨し、結果としていくつかの良いシステムが生き残ったのです。

これら制度の支援を受けて、若い世代の子育てが格段に楽になりました。それが、人口の減少に歯止めがかかった要因と思われます。とはいえ、再度人口が増加に向かうほどではなく、日本の人口は当面、横ばいが予測されています。

行政首都と経済首都

さて、麦わら帽をかぶって出発です。ワタシは先年、皮膚癌で片足を大きく切除しました。

しかし、歩行補助ロボットを装着して凌いでいる間に、生体組織再生保険機構が、切除した部分の筋肉や皮膚組織を届けてくれ、これを埋め戻して完治しました。

恥をさらすようですが、若い頃の暴飲暴食の結果、衰弱してしまった肝臓と腎臓も生体組織再生保険機構のお世話になったのです。おかげで今は全く健康体です。自転車で15キロメートルくらいの道のりなど、楽勝です。

今日は天気がいいので、動力補助付き自転車で出かけます。武蔵野台地の市街地は、海から林を抜けてくる風が気持ちいいです。

人口減少と温暖化に伴い関東エリアの都市計画は大幅に変更されました。行政上の首都は長野県に移転してしまったので、今の東京は経済首都と呼ばれています。

経済活動に対する規制は、20年前とは様変わりに簡略化したので、役所の近所に本社を置く必

要はなくなりました。

また、日本企業の売り上げの8割以上は海外需要ですし、各国の制度もまちまちですから、あまり日本の規制を気にする企業がなくなりました。

このため、首都が長野県に移転しても本社を長野県に移す企業はそれほどありませんでした。むしろ最近では、急速に経済力が向上している九州や温帯になって過ごしやすくなった北海道に本社を移転する例が多いようです。

そして、東京は明治時代の再開発に匹敵する大改造を受けて、杜の都に変わりました。

樹が育つには長い時間がかかりますので、まだ変わり始めたばかりですが、将来像は見えています。

多くの幹線道路は拡幅され、住宅地の建ぺい率は大幅に引き下げられました。街路樹が、まるで林のように拡張され、里山のようになっています。あと数十年すれば、東京中が明治神宮の森のようになるでしょう。

また、幹線道路は地中と地上に機能分化され、物流は地中、人の移動は地上と棲み分けています。

地上はすべてインテリジェント道路になり、電気自動車しか走っていません。また近場であれば動力補助付きの自転車やパーソナル・ビークルが使われています。後者は目的地を言えば、勝手に人を目的地に届けてくれる自動運行ユニットです。個人端末で呼び出して乗ります。使用料は後で個人口座に請求がきます。

これが普及したおかげで、東京エリアには電車もタクシーもなくなりました。商店街も、交通渋滞とか、轢かれるリスクとかがほぼなくなり、子供が遊んでいても安心になりました。自転車事故は少しありますが、昔のような深刻な交通事故はほとんどありません。

緑化が進んだ街並み

いよいよ、読み聞かせを行う公民館に着きました。この建物は少し古いですが、今の規制に合わせた改装をしています。1つは屋上緑化。もう1つは高断熱化です。

20年ほど前に、建築規制が大幅に見直され、基本的に住宅地の建物は、周囲に緑地を作ること、躯体は300年以上の理論寿命を持つこと、屋上は緑化するか太陽光発電機能を持たせること、関東であれば家事で発生する熱で暖房が賄える無暖房住宅であることなどが求められました。

建築業界には一時、パニックが起こり、政治問題に発展しました。改めて振り返ってみると、なんの騒動だったのか……。

各地で再開発されたいわゆるコンパクト・シティの住み心地、資産価値が納得できるものであったことから、世論が賛成に回り、全国に普及してきています。

この公民館も、まるで林の中にあるようなたたずまいです。東京中が、森の中にあるようです。

昔は問題になっていたヒートアイランド現象は、温暖化の進んだ今、逆に起こらなくなりました。夏場など、今の方が却って涼しく、住みやすくなった印象です。

公民館では偶然、昔の仕事仲間に会いました。南洋の浮体植物工場プロジェクトをファンド化したときの仲間です。今では、海没してしまったリーフに代わって、浮体工場が南洋諸国の国土とみなされています。また、かなりの数の環境難民を日本が引き受けたので、その方々の居住区も日本の各地にあります。仲間と、環境難民を引き受けた当時、文化的摩擦を軽減するために開催した、南洋音楽フェスの思い出話で盛り上がりました。

そこで予定を変更して、絵本の読み聞かせではなく、そのころの思い出話を子供たちにしました。今につながる話でもあり、興味深く聞いてもらえたようです。

南洋の浮体植物工場プラントの近くや日本近海には、太陽光を水素に転換するプラントもいくつかあります。また、植物工場は、野菜などのほか、スピルリナやユーグレナなどの食用微生物の生産プラントも多く、これが世界の食料危機を救ったのです。

エネルギーは、最近、日本が主導した形式による核融合炉が実用化されたため、社会インフラは急速に電化に再統一されつつあります。ただ、一部に過渡的に導入された水素社会の名残りもあり、用途の別もあって、水素インフラもかなり稼働しています。

二酸化炭素を炭化水素に直接戻すプラントもあります。かつての石油製品の代替として普及したバイオプラスチックとの競合が始まっているようです。

さて核融合炉は、海水中の重水素を核融合させてヘリウムを得る方法で稼働しますから、島国である日本は、ほぼ無尽蔵の電力を得ることができることになりました。

既に太陽光発電ユニットを屋上配置する規制は廃止が検討されています。それよりは、緑化に注力しようということです。

世界中で行っている植林プロジェクトの関係、後述する法人税減免政策、それと勝海舟プロジェクトと呼ばれる大規模な相互留学制度の影響で、日本には世界中から人がやってくるようになりました。

このため、日本は文化の LUCK-ICHI (ラクイチ = 楽市) と呼ばれる国に変わりました。

国際平和への貢献も

また、最近の日本は、PKO (国際連合平和維持活動) の祖国と呼ばれています。沖縄県の米軍跡地の一部に作られた PKO 部隊の訓練基地には、世界各国の治安維持軍が集まっています。装備品や部隊運用方法の統一と情報システムなどの供与に、日本は多額の負担をしています。

沿岸警備の演習基地も併設されており、専用の訓練船を供与しました。海上自衛隊や海上保安庁のスタッフが高度な技術指導をしています。沖縄周辺、特に東シナ海は潜水艦追尾訓練や、多島海に潜伏する海賊の哨戒訓練などに適していると好評です。

沖縄県の基地負担を軽減するために、米軍のかなりの部分が九州に移転しました。当時、国内では国論を二分する大規模な政治闘争が起こりましたが、日米同盟の重要性と沖縄の負担に鑑

みて、結局は九州地区が負担をすることになったのです。

その代わりといっはなんですが、佐賀空港は大規模な軍民併用空港に再整備され、アジアのハブ空港としての地位を固めつつあります。リニアモーターカーと新幹線の佐賀空港までの延伸、九州全域の経済特区、関税特区化、海外売上高比率を基準とした法人税の減免措置など、付随する様々な振興策が導入されました。

法人税の減免措置は海外の有力法人の日本誘致を目指して導入されました。当初、招聘できるのはペーパーカンパニーだけではないかと揶揄されました。

しかしながら、日本社会の安全性や社会インフラの整備状況というメリットを享受したくて、実際には世界の富裕層や有力企業の本社社員一家が転居してきました。その結果、そのトリクルダウン効果も相当大きいことが分かってきました。

これらの施策によって、九州はアジア地域の主要企業が本社を連ねる、高度成長地域になりました。

自然豊かな「田舎」住まいが流行

日本全体の国土計画も、急ピッチで再構成が進んでいます。多くは、気候変動への適応が目的ですが、その機会に、基本構造の抜本的な見直しがなされ、また老朽化した社会インフラも更新されました。

東京が杜の街に変わりつつあることは、先ほどお伝えしました。札幌市から佐賀空港まではリニアモーターカーでつなぐれ、東京、新首都の中京（昔の飯田市周辺）、京都、博多と全体を4時間程度で結んでいます。

これらのハブ駅から各地の主要都市までは、新幹線やその他の高速公共交通網が整備され、地域は自家用車からパーソナル・ビークルに置き換わりつつあります。

これらの結果、日本中どこからどこへでも、概ね日帰りできるようになりました。これは、どこに住むかということに対して、日本人の基本的な考え方を変えてしまいました。離島にも、旅客仕様の飛行艇や飛行船、STOL（短距離離着陸）機などが就航して、全国的に僻地が消滅したからです。

積極的に自然豊かな「田舎」に住むことが最近の流行です。実際、何も不便はありませんし。

豊富な電力を基盤に、植物工場が各地に整備され、また無農薬栽培の地物の栽培も技術革新が進んで、農業は日本の基幹産業の1つになりました。おいしい食べ物が、地産地消を原則として豊富に提供されるようになったのです。海産物も、抗生物質をほとんど使わない養殖技術が確立し、世界中の海洋を搾取する構造がなくなりました。

日本は、金額ベースと資本ベースの2つの尺度では10年前から食糧の実質輸出国でしたが、今年国内で生産した農作物のカロリーベースでも、自給率100%を達成しました。10年程度先にはこれが150%程度になるのではないかと考えられています。

ネガティブな要素は星の数ほどあれど・・・

日本社会は、この20年間、不断の自己改革を遂げてきました。

その結果として得られたものが、今の社会モデルです。社会教育システムの見直しが成功の要因だったとか、合意が得やすい緊密な民族意識が成功の要因だったとか、海外の研究者はいろいろなことを言います。

しかし、20年前、これらの源流となる改革がなされた頃は、そんなことは全く指摘されていませんでした。

今でも思い出すのは、あの当時の政治の混迷、2008年頃から2012年くらいまで続いた、日本政治の過渡期です。

当時、この国を諦めるのは簡単なことでした。今から思うと不思議かもしれませんが、だって、ネガティブな要素は星の数ほどありましたから。右を見ても左を向いても、いかに日本がダメかという議論ばかり。

でも、ちょうどその頃、いろいろな所から、新しい春の芽吹きが起こり始めていました。

不人気を承知で、国家にたかるな、日々の仕事に帰れと主張する政治家。

社会の無気力に対しそれにもかかわらず！と健筆を執ったジャーナリスト。

社会を救う仕事を作り出していった起業家たち。

日本は民主国家。職業として政治を行うのは政治家であるけれど、それを支え、監視し、また批判して、政治を良い方向に持っていくのは、ワタシたちの国民なのです。

結果としてできあがった今の社会や繁栄より、このことのほうが大事。

諦めたら、怖れたら、何も始まらない

ワタシは、20年の時を越えて、「あの頃」を思い出すのです。

人々が政治を諦めず、今につながる道を切り開いていったあの頃。

人々が理想を諦めず、日本を越えて世界を救おうとしたあの頃。

人々が議論を怖れず、自分が素敵に生きるにはどうすればよいのかを考えたあの頃。

どの街角にもいるワタシが、この国の主人公なのだから。

(幸福達成計画「やちよ文明構想」より抽出)

市井の一市民による21世紀における日本の歴史的使命を再定義する作業を通じて、

日本経済を持続可能にするための具体的な政策提言、および人間社会の評価軸として、

自分、家族、地域、国家、世界全体という同心円の中で、すべて無矛盾にその幸せを追求したい。